The Japan Society for Studies in Journalism and Mass Communication

できるデータを提供すること、②環境、食品、生命など、あらゆる面で、社会に対する危険信号を敏感にキャッチすること、だと思う。

以上のような問題提起を受けて、会員からは、「科学的なニュースの内容をチェックするのが任務の一つといいながら、たとえばチェルノブイリ事故についての外電のチェックは、うまく機能しなかったのではないか」「意識調査によれば、原発について科学専門家は〝安全で有用〟、一般民衆は〝有用だが危険〟と認識しているように、科学専門家と一般民衆との間には、大きなギャップがある。科学記者はその間のどこに位置すべきなのか」「社会や生活に密着している地方記者にこそ、科学知識は必要なのではないか」といった意見や質問が出された。

いつもよりワークショップの時間が短かかったせいもあり、これから本格的な論議が始まりそうなところで、終わりになってしまった。問題提起者も参加者も、不完全燃焼の不満が残ったのではないかと思う。

（新井直之）

秋季ワークショップ・6

マス・コミュニケーション理論の再検討

問題提起　水野博介（埼玉大学）
司　会　児島和人（東京大学）

このワークショップは水野博介氏の問題提起とそれに続く十四名の出席者の議論とで行われた。

問題提起は大きく次の三点からなっていた。第一は海外の理論の無批判的適用、日本の状況に即した問題意識や理論化の欠如、社会構造に及ぼす高度情報化の影響研究の乏しさなどにみられる〈日本の研究の歴史と現状の批判〉である。第二は〈研究方法の基本的前提〉である。それは三点よりなる。すなわち社会的・文化的諸制度とマス・メディアとの構造的な関連の明確化、その上で実証的研究をすすめるための適切な分析単位の設定と社会学的諸理論の積極的応用とによる中範囲の理論化、そして受け手個人中心の理論を社会的状況と関連させ、あるいは実践的視点から検討することの必要性である。第三点として、以上の二点をふまえ、〈情報システムとしての生活〉が分析単位として提唱される。具体的にはあるライフ・ステージやカテゴリーに属する個人が、生活の各領

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Studies in Journalism and Mass Communication

域や諸場面で、横断的・時系列的にどのように情報を利用し、それに影響されているかを探っていく方法である。そして普遍的理論構築より日本社会と文化の特質研究の一環としてのマス・コミュニケーション・メディア研究をすすめることの有効性、有利性が主張された。

問題提起後の議論も多岐にわたったので、限られた紙幅で要約は困難であるから、とくに次の三点だけ紹介しておきたい。

第一は問題提起者が自らの研究関心から受容過程に中心をおいた「マス・コミュニケーション理論の再検討」を行ったことの意義は何かであった。これは高度情報化の進展とも絡み、また〝受け手〟像の再編とも関連する大きな問題であると思われた。第二は戦後日本のマス・コミュニケーション研究の評価の問題である。マス・コミュニケーションの日本的理論の有無と必要性、日本におけるマス・コミュニケーション研究の問題意識の独自性、外国の理論の導入の仕方の問題点などがとり上げられた。〝再検討〟はこれまでの評価抜きでは考えられないだけに、この点についても多くの発言があった。第三は分析単位としての「生活」の提唱をめぐる議論である。社会の構造的側面へのマクロな視点を保持しつつ、具体的分析単位としての個人生活というミクロな単位の設定がいかにして可能かまた有効かが問われた。すでにこの視点が利用と満足研究で蓄積されてきているとする過去の研究評価とも絡んで、一つの大きな論点であった。

このテーマについてのワークショップは今回が初めてであっただけに、問題提起と議論とで幅広く多様な論点が出された反面、具体的、個別的問題についての掘り下げは今後の課題として残された。それは今日のマス・コミュニケーション理論研究が当面している未開拓の大きな課題の存在を示すものであろう。企画主旨の予告内容、問題提起内容、参加者の期待と問題関心の三者を密接に関連させながら、より掘りさげた議論の展開という次の段階に進むことを期待したい。

（児島和人）

秋季ワークショップ・7

情報学の構築
―社会情報の研究方法―

問題提起　吉田民人（東京大学）
司　会　岸田　功（文教大学）

「すべての科学が〈情報〉という基礎概念のまわりを旋回するようになった」（ジャック・アタリ）と言われるほど「情報」概念が諸科学に応用されている。そこで学際的な「情報科学」

NII-Electronic Library Service